

[22]

氏名	徐克偉
博士の専攻分野の名称	博士（外国語教育学）
学位記番号	外博第18号
学位授与の日付	平成29年3月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	日本蘭学翻译中的汉学资源及其局限：以《厚生新编》（1811-45）为中心
論文審査委員	主査教授 沈 国威 副査教授 山崎 直樹 副査教授 玄 幸子 専門審査委員 名誉教授 松田 清（京都大学）

論文内容の要旨

徐克偉氏の博士学位請求論文『日本蘭学翻译中的漢学資源及其局限：以『厚生新編』（1811-45）为中心』（蘭書翻译における漢学の役割及びその限界：「厚生新編」（1811-45）を中心として）は下記のように、序章に続き、上編4章と下編6章からなり、最後に終章が置かれている。章の下には節と項が設けられている。

序章：『厚生新編』：江戸幕府的翻譯事業

（『厚生新編』：江戸幕府の蘭書翻譯事業）

上編：東西方知識的碰撞與融合

（東西における知識の衝突と融合）

第1章：以「厚生」為目標的翻譯

（「厚生」を目指した翻譯事業）

第2章：本草書的参考與批判

（本草書の参考と批判）

第3章：其他傳統科技文献與一般漢籍的参考問題

（その他の科学技術文献及び一般漢籍の参考）

第4章：漢譯佛經與漢譯西書の参考問題

（漢訳仏典と漢訳洋書との参考）

下編：新概念の輸入與創制

（新概念の輸入と創出）

第5章：蘭学翻譯中的文体與譯詞問題

（蘭学翻译の文体と訳語）

- 第 6 章：譯詞創制三法：「直譯」「意譯」「音譯」概念溯源
（訳語創出の方法：「直訳」「意訳」「音訳」について）
- 第 7 章：音譯詞及其漢字選択
（音訳語及びその漢字選択）
- 第 8 章：七曜日：従傳統向現代的轉變軌跡
（七曜日における伝統から近代への軌跡）
- 第 9 章：「解剖学」概念的確立及其中日交流
（「解剖学」という概念の確立及びその日中交流）
- 第 10 章：譯詞創造與拉丁語学習
（訳語創出におけるラテン語学習）
- 終章 参考與批判：蘭学視野下の漢学
（参考と批判：蘭学翻訳の視点から見た漢学）

大航海時代以降の知識の移動を、中国の歴史学界では「西学東漸」と呼ぶ。日本においても江戸幕府統治下では禁教、海禁など、いわゆる鎖国政策が実施されていたにもかかわらず、オランダを通じて西洋文化、実学の知識を取り入れようとしていた。いわゆる蘭学である。初めての解剖書『解体新書』（1774）の翻訳・刊行は象徴的な事件である。1811年以降、江戸幕府は蘭書の翻訳機関として「和蘭書籍（蛮・蕃書とも）和解御用」を設置し、百科全書の『厚生新編』の翻訳を命じた。十数人の優れた蘭学者が三十余年にわたる努力の末、百巻からなる訳稿を完成させた。これにより、蘭学は民間にとどまらず、公学としても認められた。徐克偉氏の研究は、この国家事業として行われた翻訳書を取り上げたものである。

江戸幕府の翻訳事業とその最大の成果である『厚生新編』に関する研究は夥しい数に上るが、これまでは翻訳が誰によって、如何ように行われ、その完成度の程、つまり翻訳体制、訳者、訳語、翻訳文体が主な研究対象であった。しかし、近代的な解釈学の視点からすれば、翻訳活動と知識の生成・更新とは新旧の交渉・融合の過程であり、いわゆる「地平融合」（fusion of horizon）に到達したものと捉えられている。翻訳主体の知識素養、外来文化に対する姿勢も翻訳活動そのものに大きく影響を及ぼすと考えられている。周知のように、江戸時代において、儒学、特に朱子学は幕府によって国家支配のための思想として採用され、公的な学問に定められた。漢語・漢文は知識人の基本的な素養であったため、漢学の存在は非常に大きかった。漢学が、江戸時代のみならず、明治以降の近代化プロセスにおいても大きな役割を果たしたことは否定できない。

従来の研究の多くは、イエズス会士らによる漢訳洋書の蘭訳書への影響を論じている。また一部の研究者は、蘭学者の漢学素養を蘭学発達の基礎と契機とみなし、その博学を称賛する一方で、西洋文化（近代）への転向は、漢学（伝統）からの離脱と強調している。徐克偉氏は、蘭学の勃興における漢学資源の役割とその限界を明らかにすることは、日本

における西洋知識の受容を考える上で、特別な意味を持つであろうと考えた。

蘭学史の全容記述には、漢学の存在が無視できない。蘭学と漢学の遭遇は、概して化学反応が起きると同様に、異質な文化の間で、別の新しいものが誕生する可能性の高さを示している。徐克偉氏の論文は、正に蘭書翻訳における漢学の役割とその限界という視点から、両者の衝突、揚棄、継承の関係を明らかにしようとするものである。

徐克偉氏は、蘭学資料の中で質、量ともに他を圧倒する『厚生新編』を取り上げた。同書を選んだ理由は、幕府公認の翻訳事業という文化史上の位置づけのみならず、本書が、百科全書としても豊富な内容を有し、他の学問分野の翻訳、受容にも大きく関わったからである。

以下、各章の内容を略述する。

序章『『厚生新編』：江戸幕府の蘭書翻訳事業』では、従来の『厚生新編』に関する先行研究を整理し、その成果や問題点を指摘する。続いて筆者が目指そうとする研究の目的、方法を論じ、論文の構成を提示している。

上編は、蘭学翻訳における漢学資源の利用実態に関する考察で、4章からなる。「東西における知識の衝突と融合」という視点から訳稿に反映された西洋知識の受容法と訳者の学問的バックグラウンドとの緊張関係を分析する。第1章「『厚生』を目指した翻訳事業」では、漢学知識を参考とした理由及びその範囲を整理した上で、文献の分類を行った。第1章での分類を踏まえ、第2章以降では、それぞれ「本草書の参考と批判」、「その他の科学技術文献及び一般漢籍の参考」、「漢訳仏典と漢訳洋書との参考」について論じている。徐克偉氏は上編において、蘭学翻訳者が最も重要視した実証的精神と知識の実用性という特徴を実際の訳例に即して論述し、蘭学者にとって、漢学とは何かを継承と揚棄の両面から綿密に解明した。

下編は、6章からなり、「新概念の輸入と創出」というテーマの下、翻訳文体、訳語創出法、外国語知識などの角度から、『厚生新編』の翻訳を考察していく。第5章「翻訳文体と訳語」は、『厚生新編』をはじめとする蘭学翻訳の文体を論じ、書記体系の「共通語」（リンガフランカ）・二言語使用（ダイグロシヤ）における高位言語としての漢文の地位、さらに漢文訓読体が遍く利用されたことを分析し、同時に、和漢混淆文（漢字平仮名交じり文）の形成、認知及び翻訳者・読者間のすれ違いを考察することにより、膨大な漢字訳語の存在意義を説いた。第6章「訳語創出の方法：「直訳」「意識」「音訳」について」は、特に蘭学書にみる訳語法の源流・変遷を漢訳仏典まで追究し、蘭学翻訳、ないし明治期以降の訳語創出への貢献を論じた。本章では、漢訳仏典の他、儒教経典にも調査を広げ、また翻訳論的に、「直訳」「意識」「音訳」について、適用順序、限界、変化を詳細に考察した。第7章「音訳語及びその漢字選択」、第8章「七曜日における伝統から近代への軌跡」、第9章「解剖学」という概念の確立及びその日中交流」は、それぞれ具体的な事例を取り上げて、音訳、意識、逐字訳といった観点から蘭学者たちの作業を考察した。訳語創出、そして近

代国語の形成過程において、漢学資源の役割・限界を論じたのち、第 10 章「訳語創出におけるラテン語学習」では、蘭学者のラテン語学習に対する姿勢を漢籍学習との比較において考察した。

最後に、終章として、「参考と批判：蘭学翻訳の視点から見た漢学」をテーマとして、蘭学者が如何に漢学資源を利用し、翻訳の最高峰とされる『厚生新編』を成し遂げようとしたのか、またその過程における漢学と洋学、伝統と近代の超克とその本質を論じた。

以上、各章で示したように、徐克偉氏の論文は、『厚生新編』を例に、従来の蘭学研究では、十分に検討されなかった漢学資源の問題を堅実な文献学、書誌学的手法と豊富な外国語知識で、実証的に考察した。その範囲は、文体、訳語知識・言語の問題を究明することにまで及ぶ。

他の蘭学書と同様、『厚生新編』にも、翻訳だけでなく、注釈としての「按語（コメント）」が多く含まれている。これらの「按語」にも大量の漢学資料が確認できる。徐克偉氏は、『厚生新編』の按語を西洋の知識を受容するに際し、蘭学者の東西ないし新旧の間での揺れと葛藤と捉え、重要な思潮として活用した。また注目すべき点は、徐克偉氏の研究目的が、漢学の存在を跡づけその影響を論証するのみでなく、蘭学の構造、知識の生成・転化に対しても考察を試みたことである。

徐克偉氏の論文は、ややもすれば西洋・東洋と簡略化されがちな視点を、欧・中・日という複眼的なとらえ方に還元させたことである。近世・近代における東アジアの学術史を考える際には欠かせない視点であると言える。

論文審査結果の要旨

論文の提出に先立ち、提出要件審査委員会（委員：沈国威、玄幸子、染谷泰正）は、徐克偉氏が本研究科の定める「博士論文（課程博士）審査に関する覚書」の論文提出基準を満たしているかどうかを確認した。その結果、同氏は、一）必要単位（8 単位）を取得済みであり、博士論文のテーマと関連する分野で、二）論文 6 編（うち 1 編は査読有りの中国の学会誌掲載論文）；蘭学文献翻訳 8 点（12 万字）、三）口頭発表 10 回（うち国際学会 8 回、国内学会 2 回。香港中文大学とルーヴェン大学での学会発表は、厳格な審査を経て、若手研究者として招待されたもの）を有し、四）博士論文聴聞会（平成 28 年 6 月 4 日）も終え、論文提出のすべての要件を満たしていることを確認の後、研究科委員会（平成 28 年 7 月 27 日開催）に報告し、同氏による論文提出の承認を得た。これを受けて平成 28 年 9 月 27 日に徐克偉氏から提出された論文を学位請求論文として受理し、研究科委員会（平成 28 年 10 月 12 日開催）において承認された論文審査委員会（主査：沈国威、副査：山崎直樹（染谷泰正先生の交代要員）、玄幸子、学外委員：松田清）での審査に入った。

提出された中国語論文（本文 362 頁、索引 18 頁）は、本報告書「1. 論文内容の要旨」

において述べたように、膨大な蘭学資料をはじめ、中国典籍、江戸期以降の外国語（オランダ語、ラテン語、英華・英和）辞書等の関連資料を徹底的に調査し、精密に検討していた。また参考文献にも記されたように最新の研究成果もふんだんに取り入れている。これらの大量の文献・資料を綿密に分析し、『厚生新編』の翻訳における種々の知識の出自を明らかにした。

徐克偉氏の論文は、東アジアにおける近代知形成と文化交流の研究について実証的な視点からのアプローチを試み、翻訳論・翻訳史・訳語史の研究にわたって考察する意欲的なものである。研究手法の堅実さは評価に値するだけでなく、これまでに誰もが漢学資源の存在を予想しながらも実証的に解明しえなかった課題に対して積極的に答えを出そうとするものであり、徐克偉氏の研究者としての自覚の高さが窺える。

さらに次の3点からも、本学位請求論文は、優れたものと判断できる。

- (1) 文化交流における相互作用を見据えた問題意識：これまで明らかにされていなかった中国の本草学、医学及びその他の知識が如何に蘭学者によって取り入れられ、批判、利用されたかを検証し、信頼できる結論を得た。
- (2) インターネットを駆使するだけでなく、所蔵図書館等に自ら出向き、実物確認を怠らない研究姿勢は、書志学、文献学にも利用価値の高い調査資料に結実した。
- (3) 最新の翻訳、或いは文化受容理論を応用し、近世、近代の翻訳活動に新たなスポットを与えることにより、個別事象として考察された事柄が東アジアにおける知識の受容、環流というより大きな射程を得た。

以上により、徐克偉氏の論文は、研究の方法や内容、記述の体裁や論理など、すべてにおいて所定の水準に達しており、博士論文としてふさわしいものであることを、論文審査委員会一同が認めた。